

子規のみちのくへの旅 (三)

—『はて知らずの記』をめぐって

黒澤 勉

(岩手医科大学 教養部 文学)

(注)

①本稿は『医事学研究』第二十号(二〇〇五年刊)所収の「子規のみちのくへの旅—『はて知らずの記』をめぐって」に続くものである。

②「日本」新聞記者であった子規は、明治二十六年七月から八月にかけて、東北地方を旅し、旅先から記事を送って、それが逐次的に、連載の形で発表になった。明治二十八年これを一冊にまとめて単行本として刊行した。その際、新聞「日本」初出の記事に手を加えている。

③『はて知らずの記』は一人称の紀行文であるが、本稿においてこれを「子規は」という三人称のスタイルに改め、また、自由に批評、考察を加えた。口語訳するのが目的でなく、子規の東北への旅がどのようなものであったか検証するのが、本稿の目的である。

十四、笠島の道祖神—古嶋一雄宛書簡から

(明治二十六年)七月二十七日、この日子規は飯坂温泉を発って桑折から汽車で岩沼に至り、笠島の道祖神に詣で、中将、藤原実方の墓を訪ねている。新聞「日本」連載の『はて知らずの記』には、次のような歌が記されていた。(単行本にするにあたってこれを削除している)

「実方中将の墓にまうでて

かたみだに今はなつのしの薄まだ穂にいでぬ風の色哉」(中将の面影は、今は、形見すらなく、まだ夏の野の、穂の出ない薄を吹く風の色があるばかりだ)

歌は藤原実方の「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」(私があなを恋しているその深さは、このようだとだけでも口に出して言うことが出来ない)ので、それほどの思いであるとあなたは御存知ありますまい。この私の燃ゆる思いを。百人一首『後拾遺集』を踏まえた歌であるが、子規は恋歌を懐旧の歌とした。

笠島の中将の墓から増田まで、汽車に乗って仙台に入る。仙台で一泊する。(子規の泊まった宿は国分町にあった針久旅館だという。)一泊しても疲労はとれない。二十八日も、一日いっぱい宿で眠り続けた。夜になると十六夜の月が澄み渡り美しい。月を見ているうちに、あこがれの松島行きが強く思われた。夜更けで最終の汽車も出てしまったため、この宿に二泊することとなった。

子規はその宿から「日本」新聞の編集長であった古嶋一雄に宛てて書簡を送っている。その内容は笠島の道祖神に奉納された木彫りの陽物のことであった。

実はこの陽物について「日本」新聞の初出には「堂宇破るるにまかせて繕はねども、あやしき物を奉ること今に絶えず」とあり、その後「京都六条道祖神の女の商人に通じて終にここに身まかりたりとかや。口碑固より定かならず」と記した後「われは唯旅すずしかれと祈るなり」の句が添えられていたのである。それを単行本として『はて知らずの記』を出版した際、「あやしき物」の記述など品位に欠けるものとして削除したらしい。

ところが、この記述を削除したために「われは唯旅すずしかれと祈るなり」の句の真意が伝わりにくくなってしまった。子規は奉納された陽物を見てどう思ったのか、それを探る手掛かりが、古嶋宛て書簡でもある。面白い書簡なので、ここにその全文を紹介しておく。

「拝啓 昨今寒冷なれば大分御地も凌ぎ易き事と存候。小生二三日来、寒熱激変の為、心地例ならず、今日は紀行を認むる事もいやに候。其代り無類の珍聞御報せ申し上げ候。

小生古跡探究の為、病苦を侵して、わざわざ笠島といふ処にまはり候処、山村寂々老杉うつその間、一祠あり。道祖神と申候。この境内なりに大なれども、堂宇荒廢、風雨の破るるに任し候へども、およそ社内にこれ程多くの宝物を蔵する所は他に比類これあるまじく、さてその宝物は屋中に蔵するに非ず。堂中、堂外に陳々相依るものにござ候。其の形は

甲（図あり）

乙（大小の図あり）

のごとく甲図は巧なるものにして、乙図は拙なるものなり。大きは二尺ないし三寸位迄に候。ことごとく桐にてつくりたれば、尿道の通し居る処によくよく御目をつけられ御覧下さるべく候。色は白多けれど、時として全身赤きもの、半身赤きものなどこれあり候。しこうして、この宝物は村民の奉納するものにて累々として積むものなり。外格子などにはさみあり候。社門の矢大臣も手に宝物を按じをり候。その小なる者一箇、

是非貴兄への御土産に持ち帰りたく、ために尋ね候へども小なるものに限る、あまり拙劣ゆゑ、見合せ申し候。当地巡査の話す所によれば、近年は余程減少せし由の趣に候。その願ひの筋は小生相心得ず候。かうもあらふか。

何といふ願かしらねど道祖神どうぞじん虚にならぬやうにと

七月二十七日

雄様

燈台もと暗しの例への如く、点水先生もこの宮、御承知なくば御伝言下されたく候」

品のない拙劣な「宝物」に子規は辟易しつつも、詳しく報告している。書簡とはいえ、図まで添えているのはなかなか出来ることではない。文中の「陳々」に○印をつけているのも「陳列」の「陳」に「ちんちん」を掛けたものである。末尾にはユーモラスな狂歌も添えている。

この書簡によって、「われは唯旅涼しかれと祈るなり」の句は、世の男性のように「じん虚にならぬやうに」とは願わず、「唯涼しかれ」と祈ったという意味だということが分かる。

そもそも道祖神というのは、道路の悪霊を防いで旅人を守る神である。それが近世に入つて良縁、出産、夫婦円満の神ともなり、こうした品のないものを祀るようにもなった。子規はそれを見てあきれ果てて「われは唯旅涼しかれと祈るなり」と道祖神の前で旅の安全を祈る句としたのである。

それにしても子規のリアリズムはこうした世にはばかられるようなものまで直視し、記述する自由なとらわれのない、明るい心であったといえようか。学生時代に同じ故郷の友人、清水則遠が亡くなつて埋葬したことを報ずる書簡の中でも、墓標や寝棺を乗せる蓮台のスケッチまで描いていたことが思い出される。

子規が笠島を訪れたのは平安時代の歌人藤原実方の墓があること、芭

蕉がそこを訪れようとして果たせなかったことが背景にある。即ち『奥の細道』によると次のようにある。

「**笠摺**・白石の城を過ぎ、笠島の郡こほりに入れば、藤中将実方の塚はいづくのほどならんと人にとへば『是よりはるか右に見ゆる山際の里をみのゆ、笠嶋と云ひ、道祖神の社・かた見の薄今すすきにあり』と教ゆ。このごろの五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、**箕輪**・笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道」

芭蕉は雨天で道が悪かったため、また疲労が重なっていたために、笠島を詣でる事なしに岩沼・仙台へと足を進めていったのである。子規はその芭蕉の無念をはらし、実方の中将の墓を詣でたのは良かったが、その近くの道祖神をまつる祀に辟易させられた、というのが笠島での体験であった。

十五、つつじが岡……桜の木の茂り

子規はこうして仙台の宿で旅の疲れをいやしながら、古嶋一雄宛の書簡も書いた。その夜、十六夜の美しい月を眺めていると、松島へ、松島へと、心もはやる。

七月二十九日、子規は仙台駅の裏手になっているつつじが丘を訪れる。

(国分町の宿から徒歩で行ったと思われる)『はて知らずの記』では「躑躅岡とも山榴岡とも書き、古歌の名所なり」と、この地を紹介している。(現在は宮城野区榴ヶ岡となっている)

つつじヶ丘は桜の木が茂りあって空を蔽い、日の光をさえぎっている。涼しい風が腋の下を吹きぬけていく。ちなみに、この桜は元禄八年(一六九五)四代藩主伊達綱村が母の、三沢初子の冥福を祈るために釈迦像を建立したさいに植えられたもので、現在では子規が訪れた時のように、あるいは、それにも増して、つつじが岡は、つつじならぬ桜の名所となっている。しかし、かつて古歌に、「みちのくのつつじの岡のそまつづらつ

らしといもをけふぞ知りぬる(『古今六帖』)」と詠まれ、あるいは「とりつなげ玉田横野のはなれ駒つつじが丘にあせび花咲く」(『散木奇歌集』)と詠まれたつつじで知られた歌枕の地であった。

『奥の細道』には「玉田、よこ野、つつじが丘はあせび咲くころなり。日影ももらぬ松の林に入りてここを木の下といふとぞ。昔もかく露ふかければこそ『みさぶらひみかさ』とはよみたれ」とある。これは「みさぶらひみかさ」と申せ宮城のの木の下露は雨にまされり」(『古今集』)という歌をふまえたもので、お供の人よ、お笠をお召し下さい。木の下露は雨以上にひどく濡れますから、というのである。

十六、塩釜神社……涼しさの猶有り難き

つつじが岡の駅から石巻線に乗り、塩釜で降り、塩釜神社に参拝する。数百段も連なる石の階段の両側には、幾千株もの老杉が立ち並び、足もと冷え冷えと涼しく、この世ならぬ別世界に遊ぶ心地であった。石段を昇りつめて、神前にぬかづき、祈願し終えると、和泉三郎が寄進したという鉄の燈籠を見る。その大半は当時のものだという。燈籠の鉄はすっかり錆びて、側に並ぶ杉の大木と共に、七百年昔の有様を偲ばせている。

炎天や木の影ひえる石たたみ(炎天のさ中、ここ塩釜神社だけは別世界のようだ。立ち並ぶ杉の大樹の作る木陰がひんやりと涼しく、石たたみを心地よく歩いていく)

神社の先端に立つて見渡す。塩釜の景色は山低くして、海は平らか、家屋が鱗のように重なって並び、人馬は蟻のように行きまわっている。塩釜というその名の由来ともなっている塩焼く煙でもあろうかと思つて注意してみると、それは汽車、汽船の出入りする煙である。歩いている人は、歌を詠む王朝の貴族でもあろうかと思つたが、さにあらず、日本の名所を欧文の旅行記を頼りに巡ろうとする青い目の紳士と見える。山河自然は昔と変わらないのだが、それを見る人は同じ人ではない。歲月は移り変わっても昔の名歌は今になお残っている。その歌を思い浮かべな

がら子規は往時をしのんだ。

涼しさの猶有り難き昔かな（ここ塩釜神社の古色蒼然とした杉の参道に涼しい風が吹いている。その風が吹かれているとそぞろに王朝の有り難い御代のことか思い出されてくることだ）

『奥の細道』によると次のようにある。

「早朝塩かまの明神に詣づ。国守再興せられて宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階、九仞に重なり、朝日あけの玉がきをかがやかず。かかる道の果、塵土の境まで神靈あらたにましますこそ吾が国の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き宝燈あり。かねの戸びらの面に『文治三年和泉三郎寄進』と有り。五百年來の佛、今日の前にうかびて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳命今に至りてしたがはずといふ事なし。誠に『人よく道を勤め、義を守るべし。名もまた是にしたがふ』といへり」

五百年前に和泉三郎なる人物が寄進した宝燈（鉄の燈籠）を芭蕉が見、それをさらに二百年後の子規が見た。明治二十六年は芭蕉没後二百年の年であり、そのことを意識しての子規の旅であった。いちいち『奥の細道』にはこう記されているなどと、断つてはいないが我が前に歩いた人物として子規は芭蕉を意識していることは明らかであろう。

十七、松島湾……涼しさのここを扇の

小舟をやとつて塩釜の港を出発し松島の真中へと舟をこぎ出す。入海の大方は干潟となつてカモメが白く処々に降り立ち、それが山の緑と調和がとれて美しい。進みゆく舟からの眺めで、まず最初に見えるのが籬が島である。この島は別にとり立ててどうとしない平凡な島なのだが、そのわりに名が知られているのは塩釜に近いからであろう。この島を「波の花をもって結つた」と歌で詠んでいるのも子規には興味深く感じられる。

涼しさのここを扇のかなめかな（自分を乗せて松島湾を舟はこぎ進んでいく。パノラマのように広がる湾の風景のここがまさに扇の中心と

なっている）

山はしだいに開けて、海は遠く広がっている。舟から見える島々は、縦に重なつて見えるかと思ふと横に連なり、どの島が遠く、また近いともわかまへがたく、無数の島々が浮かんでいる。一つの島と見えた島が二つになり、また三つに分かれ、縦に長いと見えた島も舟が進むにつれて幅狭くなる。細く尖つて見えた山はしだいに丸く、平らになつていく。静かに進みゆく舟中であつて、子規には自分の位置が移動するのではなく、海の景色の方がまるで生きて動いているように見えた。やさしく手のひらにも乗せられそうな小さな島が波に洗われ、下の方が細り、上のほうがふくらんで見える。そんな島に一、二本の松が倒まに、危ういばかりに海中にはい出して、かえつて大きな松より見えたえがある。と、思つてみるとみるうちに外の島に隠れてしまふ。いくら眺めても見飽きることのない風景である。船頭は言う。

「松島に七十余りの島があるといわれていますが、実は西は塩釜から東は金華山に至るまで海上十八里を合わせて数えると八百八の島があると伝えています。そらごらんさい、彼方に高く海上に現われているのが金華山です。こちらにそびえている山は富山観音です。船の方角にあるのが観瀾亭、少し観瀾亭に続いているように見えるのが雄島です。さあ船も着きましたゆえ、どうぞ陸にお上がり下さい」。

美しい風光に心奪われ恍惚として、観月楼に上がつていく。涼しさの眼にちらつくや千松島（松島湾に舟を浮かべ、涼しい風に吹かれる。その涼しさのうちに無数の松の島々が目にちらついて見えることだ）

「日本」新聞に発表した初出では、この句「涼しさのはらわたにまで通りけり」となっている。思えば東京の暑さの中で、病床にあつて憧れたのは松島のこの涼しさだった。今、子規はそれを存分に味わつた。それは単に風の心地良さだけでなく、遠く広がる海上に浮かぶ複雑な変化に富む島々の美しさと共にあつた。変化してやまない風光の中心に自分が

いて、ほしいままに堪能する。何か美の天下をわがものにしたような思いであったろう。続く文章はそうした気宇の壮大さが秀吉、政宗の面影と重なって述べられている。

十八、観瀾亭―なき人を相手に語る……

観月楼の障子を開け放つて眺める。その美しい眺めは、目に飽くこともないが取りあえず、観瀾亭に行くこととした。この宿の門前、数十歩のところにある。老婆が出て案内してくれた。老婆は言う。

「この建物は伊達家の別荘で、三百年の昔、豊臣秀吉が伏見、桃山に築かれたものを、政宗公に賜り、その後、三代目にあたる肯山公がここに移されたものだとのことです。彫刻や螺鈿のような装飾はございませんが、素朴でさびた味わいは、いづくせない趣がございます。数百年の歳月を経て、いささかも腐朽のあともございません。伝えていうことには、何でもこの建物の一本の柱、一枚の板もことごとく唐木を使用しているとのこと。思うに、一世一代の豪奢というべきでございましょう。襖や板戸の絵は皆、狩野山栄の筆になるものとか。あつさりした中にきめこまやかなところがございます。」

狩野派の一派なのだろう。廊下に坐して見渡すと、雄島五大堂を左右に控えて福浦島が正面に当り、その他の大小の島々がなり、媚びるがごとく、ほほえむごとくにも見える。真に美しい眺めである。ああ、太閤秀吉、伊達政宗は共に天下の豪傑であり、松島はわが国第一の好風である。しかも、今やその人を招いてこの亭中に、この絶景を鑑賞してもらうこともできない。それはまことに残念なことだ。だが、この風光が昔と変らず天下に冠たる限り、涼しい風がたつぷりと吹いて夏の暑さを忘れるような時、あるいは又、一輪の月が空にかかる秋たけなわの時、秀吉、政宗両雄の魂が互いに手をとりあつてここに集い、松島の風景を眺めているに違いない。私も一介の貧しい書生であり、もとより矛を構えて千軍あるいは万馬を走らせる勇氣もなく、手をこまねいて一州一郡を

子規のみちのくへの旅(三)―『はて知らずの記』をめぐって

治める力もないとはいえ、その意気昂然たる点において、どうして人に譲るといふのか。まして風流の文芸の世界においては明国を驚かし、ローマ帝国をあざむくような手段をもってしても、なお、その気概を奪うことができないか、などと子規は気分の高揚するのを覚えた。左右を見回すと両公の面影がほうふつと浮かび、ほほえみかけているようである。しかし、傍らの人はむろん、子規のそのような思いを知るはずもない。なき人を相手に語る涼みかな(今は世になき秀吉公、政宗公を相手として語りつつ、天下第一の風光を楽しむ、そんな涼みであることだ)

十九、瑞岩寺……政宗の眼もあらん

瑞岩寺に参詣する。山道の両側の杉林の、一町ほど奥まったところに山門がある。山門をくぐって境内に入る。苔むした、むしばまれた堂宇ながら、昔の面影を今にお伝えている。まことに古雅幽静の言葉にふさわしい寺である。山門近くに俳句の碑が立ち並んでいる。よく注意して詠みながら歩くが、これといつて見るべき句もない。ただ、「春の夜の爪あがりなり瑞岩寺 乙二」の句のみは古今を絶する名句と思われた。

この句は、春の夜のしだいにのぼり道になっていく参道を瑞岩寺めざして進んでいく、というような句であろうが、瑞岩寺は高い所にあるわけでないで、心理的な「高さ」をいったものであろうか。

寺に入つて宝物を見る。まだ幼い僧が案内して、玉座のあと、名家の書画や国内外の古物、文具「八房の梅の木」などの解説してくれる。ただただ尊く、有難く感じられる。

政宗の眼もあらん土用干(瑞岩寺に伝わる様々な宝物が土用干で並べられている。それを独眼流政宗とうたわれた正宗の眼が睨むがごとく見ているであろう。)

二十、五大堂……すずしさや島から島へ

瑞岩寺に続いて、五大堂に詣でる。小さい島が二つ重なるように並び、

島と島に橋を渡してある。橋は「おさ橋」といって、おさのように橋板がまばらに敷かれてあるだけで、足もとも危険で下を見ると海水がそのすき間から見える。「おさ」は織機の付属具で、縫い糸の位置を整え、緯糸を打ち込む時に用いる。竹の薄い小片を櫛の歯のように並べたものは、下の海面を見下す恐さもあって、一層涼しく感じられることだ）

おさ橋に足のうら吹く風すずし（おさ橋のすき間から吹きわたる潮風は、下の海面を見下す恐さもあって、一層涼しく感じられることだ）

すずしさや島から島へ橋つたひ（潮風に吹かれながら、島から島を渡り歩くこの涼しさよ）

専用の小舟を雇って松島七十余島の中に漕ぎ出して島めぐりしているうちに日も傾きかける。

松島や雄島の浦のうらめぐり／めぐれどあかず日ぞ暮れにける（松島の雄島の海岸を磯伝いにめぐり歩く。めぐりあくこともないまま、日は暮れてしまったことだ）

その日の島めぐりをまとめるような一首である。複雑な紆余曲折、変化に富む松島の島めぐりは、一日にしてとうてい見終わることはできない。日も暮れようとしていた。

二十一、観月楼……夕立の虹こしらへよ

舟から上がって再び宿に戻る。欄干にもたれて見る島々のその数の多さ。いずれも松の木の生えていない島はない。もし月が上ってその光に照らされたなら金波銀波の間に浮かび上がる島々のいずれも、仙人が住んでいるという蓬莱山そのものように見えるだろう。夜の更けるのを待ちながら歌や句を案じる。

夕されば妻や待つらんまつしまの小島がくれに／いそぐ釣舟（夕方になると妻が待つのであろうか、松島の島かげに急ぎゆく釣舟の姿が見えることだ）

空は雲に閉ざされ雨の降りそうな気配である。ひと雨降ったならばかえって晴れることもあろうかと空しく頼みにしながら

夕立の虹こしらへよ千松島（夕立が来て松島の島々に美しい虹をかけてほしいものだ）

と詠むが、闇は遠くの島や山を隠して、しだいに夜となる。この他に「すずしさやさらに月なき千松島」「すずしさの魂出たり千松島」なども詠み「日本」新聞に発表されている。しかし、単行本化に伴ってこの一句に集約されている。

灯ちらちら人影涼し五大堂（漁火にちらちら人影も浮かび出て、いかにも五大堂の辺りは涼しい）

今や月も出るであらうかと、雲間に月を求めるのも風流に思われ一句詠む。

松島の闇を見て居るすずみかな（松島の月にはあらず闇を見ている涼みであることだ） 小船が二艘ほど赤い提灯を灯して並び、小歌を歌い、月琴を弾きながら、そこそこ漕ぎ回るのは、その主も月を待っているに違いない。

ともし火の島かくれ行く涼み船（灯し火がちらちら島かげから見えるのはこの松島の涼み舟であらう）

波の音の闇もあやなし大海原／月いづるかたに島見えわたる（波の音が静かに聞こえるばかりで、闇のために物のけじめもつかない大海原である。ふと現れた月の出る方角に島が連なって見えることだ）

すずしさのほのめく闇や千松島（涼しい風の吹き渡る中に、月光をあびてほのかに暗い闇となつて千松島が見えることだ）

一句、二句と案じていると、月は再び雲に隠れて、闇に閉ざされる。ああ、今宵一夜こそと、待ちに待った松島の月を見ようしているのに、見ることもできない。

心なき月は知らじな松島にこよひばかりの旅寝なりとも（心のない月は、自分がどれ程松島の月に憧れてここに来たか知ることもないのであろう。今宵限りの松島での旅寝だというのに）

宿の名も「観瀾楼」である。子規はその名にあやかって、月に照らさ

れている松島の風光を我が心に描いた。

二十二、雄島、(富山の)紫雲閣へ—涼しさのここからも眼に……

観月楼に宿をとった、その翌朝(七月三十日)、子規は雄島に向かう。橋を渡って、細道を一周する。道沿いに句碑が所狭しと木立のように立ち並んでいる。一句一句、丁寧に詠んでみたが、これといった句も見当たらない。

初出の「日本」新聞には「誠に駄句の埋葬場なるべし」と酷評を書いているが、後でこれは言いすぎであったと反省したのであるうか、一本にまとめるにあたって削除している。

雄島で名高いのは坐禅堂である。その坐禅堂の傍らに、「怪しき家」があったものらしい。「名高き坐禅堂はこれにやと思ふに傍らに怪しき家は何やらん」と書いている。

ずしさを裸にしたり坐禅堂(潮風に吹かれて涼しさを味わう、その涼しさを、そのまま裸になって涼む絵にしたような坐禅堂であるよ)

かねて命じてあった小舟が宿の前に、とも綱をつないで子規を待っている。ただちに乗り移る。船頭が一棹二棹と漕ぎ出すままに舟はずん進み、早くも五大堂は後ろに遠のき、それに代わって福浦島が眼前に迫ってくる。それだけ距離も近いのである。

「この島には竹藪がありますが、その竹には穴があいていないのです」などと、船頭は教えてくれる。舟は岸伝いに楫が崎をめくり、手樽村の手前に着いた。

舟から降りると、みすばらしそうな子供が子規を案内してくれる。半里ほど進み、さらに険しい坂道を登ること五、六町。富山の紫雲閣に着く。

寺は山側に沿って建ち、庭の広さ二、三間、その向こうは見下す限り文字通りの松島である。「松島を見るには富山が一番だ」というが、さもありなん、と一人眺める。西には瑞岩寺に続く山々が連なり、東は「こ

がね花咲く」と歌われた金華山まで、大は宮戸桂の島々から小は名も知らぬ大岩小岩まで、子規はその景色をわがものにせんと、くまなく味わった。

うねうねと長く続くのは蛇島、平らかに這っているのは亀島である。月星島あり、蓬萊島がある。また、大黒島あり、毘沙門島がある。その他、何島、かに島、島の名も覚えることができぬほど多くの島々が杖の先、うち仰ぐ扇の先端に連なり、十八里続くという海面に八百八もの島々が、目もくらくらむように浮かんでいる。

涼しさのここからも眼にあまりけり(ここ富山から眺める松島の島々は、目にあまるほど数なして広がり、いかにも涼しいことだ)

松島に扇かざしてながめけり(今、松島の富山にあり、扇をかざしてその全貌を眺めたことだ)

海は扇松島は其絵なりけり(喩えてみるなら、海は広げた扇であり、松島はその扇に描かれた絵である。松島はまことに自然の生んだ芸術である)

紫雲閣の周囲を歩いているうち、一つの碑が目止まった。みると、去る年、明治天皇が東北地方を巡幸された折、お休みになられたという場所が玉座の跡として竹で囲われている。

ちなみに明治天皇の地方大巡幸は明治五年から同十八年までの間に、計六回行われている。天皇の通った所には全国各地に記念碑が建てられ、今なおその名残りをとどめているところも多い。この巡幸を通して、新時代の国民的な支えとして天皇の存在が身近なものとなり、英君、明治大帝として神格化していったといわれている。子規も明治の人間として、天皇の存在を尊いものと感じ、飄亭が自分を見送ってくれた時の句なども思い出されたのであろう。彼はその時「松島で日本一の涼みせよ」と詠んだのであった。明治大帝も「日本一の涼み」を楽しまれたのであるうと、大帝の広大な気宇を想像し、そこに自らを重ねてみた。子規にも明治の文芸界における覇者としての自負があったのである。

続いて「日本」新聞初出の記事には「唯われさきにと集ひ来し、賤しき限りは文字も得よまで其前に憚らず立ちふるまひたるはいとかたはらいたし」と記している。明治大帝の行在所の前で、騒ぎまわる観光客を見苦しいものと感じたのである。「文字を得よ」というのは拓本に写しとれ、ということであろうか。

しかし、この一文は後、削除された。そうした民衆に対する批判は、紀行の全体としての統一を欠くと考えたのであろう。初出の記事には総じて子規の生な感想、批判精神の旺盛なところがうかがわれる。

山を下て、再び舟に乗り、塩釜に向かった。船頭は、帆を順風に任せ、自身は舵（かじ）を操りながら、一つ一つ、丁寧に島を指しては、その名を覚えてくれる。数ある島として聞いても、聞くそばからたちまち忘れるのだが、忘れては聞き、聞いては忘れつつ舟旅を楽しむ。

岩あれば、そこに生える松がある。同じ地続きの島かと思えば、別の島である。進みゆくにつれて、島はたちまち後に退いて姿を変え、また新しい島のように見える。別な島かと思つて見てみると、地続きの一つ島である。一つの島が幾通りにも姿を変えて見えるから、実際には七十余島の島が八百もの島に見えるのだろうと一人納得する。

涼しさや島かたぶきて松一つ（涼しい風に吹かれて舟を進めていると、斜めに傾斜する島に一本の松が生えているのが見えることだ）

海草が水面に広がって月を宿すすき間もないほどに、生い茂っている。残念ながらこれは松島の欠点ともいえよう。それにしても、この草を土地の人は「藻」と言っているのであるか、と思つて尋ねてみた。すると船頭は「この草は冬になると全く枯れて跡形もなくなりますが、春になるとまた少しづつ生え始めるのです。昔は製塩方法も今のように入んだ技術はありませんでしたから、この草を沢山刈り集めて、焚き、その灰から塩を取ったので、今でも藻潮草と言っています」と教えてくれる。歌枕の名所、松島で「藻潮草」などという古いみやびな言葉を聞くのもなつかしく思われてまた一句詠んだ。

涼しさや海人が言葉も藻汐草（涼しい風に吹かれて松島を舟で進んでいく。この海草を何と言うのかと尋ねると「藻汐草」とのことだ。松島で、このみやびなる言葉を聞くのもまた似つかわしく風流なことに感じられる）

「藻潮草」などというなつかしい言葉を聞いた子規は、それでは、「十符の菅菰」のことを尋ねてみた。『奥の細道』の宮城野の段には「かの画図にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に、十符の菅菰あり。今も年々十符の菅菰を調て国守に献ずと云り」とあるのである。

「十符の菅菰（菰は「薦」とも書く）」の「符」は編み目のことで、編み目の十筋もある幅の広い菅菰で、菅草を乾燥して編んだ広い敷き物が都の公卿や殿上人の歌心をそそたらしく、多くの歌が詠まれている。その「十符」が地名「利府」と表記され歌枕となったものらしい。子規の脳裏には『奥の細道』の一節「みちのくの十編の菅菰七編には君をしなして三編に我寝ん（『綺語抄』）などという歌が横切ったのかもしれない。この「十符の菅菰」のことを尋ねると船頭は、詳しくとまでは言わぬまでも、おぼろげに知っていることを話してくれた。それでも子規にすれば、この土地に來なければ知り得ぬ、歌枕にまつわる新鮮な話に興がそられたようだ。

みちのくの旅は開化の象徴でもある汽車の旅ではあったが、近代化によって滅びつつある風雅の世界、みやびな古典の世界への旅でもあったのである。そうこうしているうちに舟は、塩釜に着く。

以上で子規の松島体験は終わるが、塩釜から松島へ、雄島から福浦島へ、帰路もまた松島から塩釜へと舟旅を楽しんだ二日間であった。

汽車を利用して松島を訪れる、当時としては典型的なコースであり、現在のように松島海岸駅、陸前富山駅などまだなかった時代のことである。

松島での句の数十六句、短歌二首。十六句中九句に「涼しさ」とか「涼み」などという語が使われ、季節は夏のさ中ながら子規はかねての

願い通り松島の涼しさを堪能したことがわかる。月はその姿をすべて見せてくれはしなかったとはいえ、月を待つ景も美しく描かれている。

そればかりでない、政宗の気概、明治大帝の氣宇を思い、子規は大いに浩然の氣を養った。松島の章は『はて知らずの記』の中心であり、閉ざされた病床での鬱屈は「松島で日本一の涼みせよ」と送られたごとく心身を再生した一時であった。

二十三、野田の玉川、壺の石碑―のぞく目に一千年の……

塩釜の港から徒歩で名所を尋ね歩く。道の辺に、二、三本の少し高い松の木が立ち、その下に石碑がある。名所図絵の絵のように描かれているのが、野田の玉川である。しかし、これは実際には野田の玉川でなくて政宗が政策上作り上げた名所だという。子規はそれを批判する気にもなれず、「いとをかしき模造品」だと、一人ほえんで二句をものした。「涼しさにうその名所も見て行きぬ」「みちのくの玉川蝉の名所かな」と。夏の盛りとて蝉の鳴き声もかまびすしかった。(この二句は後に削除されている)

聞けば「末の松山」も同様の「にせものの」名所だという。脇道に入らなければ行けないので、行くのは断念して、市川村に向かい、多賀城跡の壺の石碑を見る。

多賀城は、大化改新後、東北開拓の根拠地となった陸奥国府が置かれ、その後、鎮守府が置かれたところである。そこにある碑は「壺の碑」とも呼ばれ、碑面に京、蝦夷、常陸、下野、国からの距離と、多賀城設置、修造の由来が書かれ、その碑を囲う堂宇が建てられ風雨を防ぐようにしている。子規は、格子窓からのぞいてみる。文字は定かには読めないが、書かれていることについてはすでに知っていた。

のぞく目に一千年の風すずし(多賀城の、壺の碑をおおう堂宇の間から中をのぞいてみると、一千年も昔の風が吹くようになつかしく感じられることだ)

子規のみちのくへの旅(三)―『はて知らずの記』をめぐる

近くにあるという蒙古の碑は見る事が出来ず、岩切に向かい車で汽車を待った。

蓮の花さくやさびしき停車場(蓮の花が咲いて、いかにも寂しい岩切の停車場であることだ)

その夜は、仙台の宿に泊った。

「日本」新聞初出の記事には「ある説によればこも亦正しき壺の碑にあらざるよしなれど去りとは此古びやう模造なりとも数百年のものなるべし」とあるが削除された。こんな弁護じみたことを記すのも野暮だと考えたのであろう。壺の碑については幸いなことに、その後、偽物説は下火になって、今では本物と考えられているらしい。

二十四、南山閣―涼しさのはてより出たり……

七月三十一日、青葉城の麓から続く道を通って南山閣にいる槐園を訪ねた。槐園は仙台藩士、鮎貝盛房の子、落合直文の弟であり、明治二十六年、直文が「あさ香社」を起こした時、与謝野鉄幹と共にその門人として働いた人である。子規がみちのくへの旅に出る前に「日本」新聞にその作品が発表されており、すでに幾分かの交流はあった。みちのくへの旅に出たら槐園と会う約束をしていたものと思われる。

南山閣は山の上であり、広瀬川を隔てて青葉山と相対している。青葉山は、伊達藩の居城である青葉城の城跡をとどめる山であり、広瀬川は天然の水路である。東側には展望がぱっと開けて、仙台の人家が樹間に見え隠れし、太平洋の碧色が空と分かちがたく連なっている。

夕立の見る見る山を下りけり(沛然と降る夕立がみるみるうちに山から麓の方の下っていくのが見えることだ)

槐園は子規のために風呂を沸かしてもてなしてくれた。

行水をする小池や蓮の花(行水に使った水を捨てる小さな池に蓮の花が美しく咲いていたことだ)

煙のようにたなびく雲と、風雨の下に広がる仙台の光景を眼下に見下

ろしながら、槐園と短歌や俳句を論じあつて一日を過ごす。やがて雨が晴れ、空と海が相接して、その辺りにかすかに月の光がさしている。月の色は赤く、やや黒味をおびて、凄みさえ感じられる。

涼しさはてより出たり海の月（南山閣から太平洋まで見下ろしていると、涼しい夕べ、遠くの海原から月が上りはじめたことだ）

槐園もこの景にうたれて一首詠んだ。

はたたかみ遠くひききて波のほの月よりはるる夕立の雨（先ほどの雷も遠くへと去つて、波が穂をなしている海面から月が出て、夕立の雨も止んだことだ）

勧められるままに、子規はここにまた一泊する。

八月一日、朝起きて窓を開けると雨の止んだ後とて、山も川も遠いながらくつきりと明るく見える。

野も山もぬれて涼しき夜明かな（野も山も昨夜の夕立に濡れていかにも涼しく夜が明けていくことだ）

槐園もまた、一首詠んだ。

ひろせ川朝きりわけてたつ波の音よりあくろしののめ空（広瀬川の朝霧を分けるように立つ波の音から、夜の明けていく東の空であるよ）

南山閣を出て、宿に帰った。すると今度は槐園の方が尋ねてくれた。

こうして仙台で槐園と過ごすこと昼夜あわせて丸二日、二人は存分に文学を語り合い、片や句をもつて、片や短歌をもつて仙台の夜、夜明けをしみじみと詠んだ。阿吽の呼吸通うような句と歌のやり取りは二人の意気投合ぶりを示すようである。しかし、二人の語り合いはこれに尽きなかった。

二十五、愛宕山・政宗の廟・再び南山閣へ―旅衣ひとりぬれつつ……

八月二日、子規は宮沢渡の仮橋を渡つて愛宕山の仏閣を訪ねた。愛宕山は愛宕神社と大満寺虚空蔵堂で知られる。門の傍に天狗の像が安置されているので、それを見、茶店で氷水をすすった。見下すと広瀬川は足

もとの、数十丈の断崖の下を横切り、釣する人や泳ぐ人が豆粒ほどに小さく見える。川の彼方には仙台の町並が広がり、高い建物も神社仏閣もまるで掌にとるごとくであった。しかし、子規が愛宕山を訪れたのは、おそらくそうした仙台の景観を楽しむためではなかった。

松島において想像の中で政宗と語りあい、気脈相通した子規は、政宗の廟を参拝するためにここを訪れたらしい。廟の周りには老杉がうつ然とおおい、山道も細く、かすかな中に、堂宇は毅然としてその中にそびえ、わずかにその堂宇の欄間の彫り物ばかりが見える。門は堅く閉ざされ、人は入ることもできない。

常人であるなら、死んでこうした榮譽を受けるのは瞑すべきことである。しかし政宗公にあつてこのような人界から離れた僻地に葬られ、弔いの香も空しく冷え、途切れがちであるのは、はたして政宗公の本来の願いであつたかどうか、子規は政宗公の墓所を訪れ、一人寂しい思いを抱いた。

「日本」の初出記事には、この後に「涼しさや君があたりを去りかねる」と出ているが、これは削除された。しかし、句があつた方が、この場合、公に寄せる思いが出てよかつたように思うが、どうであろうか。

それにしても『はて知らずの記』において、子規が思いもかけず、亡き政宗と会つたことは重要な意味をもっていると思う。子規の中に流れていた「土魂」が政宗を通して現れ出て、明治の文芸界の覇者として雄々しく進んでいこうとの思いを確認したからである。

宿に帰つた子規は裸になつて旅衣を吊るした。

土用干や裸になりて旅ころも（宿に着き、わが旅衣を土用干としたことだ―裸になつて）

八月三日、子規は宿を引き上げて、再び南山閣を訪れた。

旅衣ひとりぬれつつ夕立の雲ふみわけて君をとふかな（旅衣に一人濡れながら、まだ夕立の気配の残る雲を踏み分けるようにして君を訪れることだ）

二人は再び例のごとく歌談、俳談に夜を徹した。古典俳句に精通していた子規はすぐれた論客であり、明確な主張と合理的な判断をもっていた。どちらがより多く語り、どちらの議論がより優勢であったろうか。

二人の文学論は翌四日の、雨の日を幸い、また続いた。五日、南山閣に別れを告げて出羽に向かった。子規はこの時、次の句を詠んだ。

涼しさを君一人にもどし置く（涼しさを君一人に残し、ここ南山閣に別れを告げて私は旅に出ることです）

「日本」新聞には、それに応えた槐園の「餞別として 草枕旅寝の夢や 迷ふらん／松しまの月きさかたの雨」という短歌が記されている。

また「涼しさを」の句の後に次の一文もある。

「槐園と共に山を下る。門前にて相別る。再び東都に相見んことを契る。折から手に持ちし一枝の桔梗も其ひびきたよりあれば

秋近し桔梗をちぎる別れかな」

槐園との文学的交遊の深さが如実に伺われる一文であり、二人の間に深い信頼関係が築かれたことが知られる。

槐園は、翌二十七年朝鮮に渡っているから、二人はおそらく再会することはなかったと思われる。

槐園は歌人としては、残っている作品も少なく、またその歌も旧派調をいくらかも出ていないとされている。その志士的な気概は鉄幹に影響を与えたというが、子規と槐園の会談も志士的な、使命感にあふれたものではなかったかと想像されるのである。